

2022年度入学生 言語聴覚専攻カリキュラムマップ

学科目	科目の主題	科目の到達目標	ディプロマポリシーの項目番号										
			凡例 ◎: DP達成のため設定された項目と強い関連性がある ○: DP達成のため設定された項目と相当程度の関連性がある										
			配分	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧		
言語聴覚専攻ディプロマポリシー	1. 知識・理解	①言語聴覚士として言語聴覚障害学に基づいた知識・技術を段階的に学び系統的に理解する。 ②言語聴覚士として必要な言語聴覚障害学の隣接学問に関する知識を学び統合的に理解する。											
	2. 汎用的能力	①対象者とその背景の情報を分析し、対象者個人への支援とともに、言語聴覚療法の対象者を支える社会の問題解決を論理的に行うことができる。 ②言語聴覚障害学に基づいた知識技術を再統合し、対象者を主体としたアプローチが実践できる。											
	3. 態度・志向性	①幅広い教養と仏教精神による思いやりの心を持ち、言語聴覚障害学という専門性に基づいた高いコミュニケーション能力を習得する。 ②言語、音声、聴覚、コミュニケーション、摂食・嚥下などに障がいのある持つ人たちが、豊かで質の高い生活を送れるようにするため、障がいについての専門知識や訓練・指導を行うための専門性の高いスキルを習得する。											
	4. 統合的な学習経験と創造的思考力	①医療、介護、福祉、教育の現場で言語聴覚士としての専門知識・スキルに基づいて、障がいのある人たちの多様なニーズに対応できる実践力を習得する。 ②言語聴覚士は障害のある人々を全人的に治療していく必要があり、言語聴覚療法領域のみに留まらず、医師、看護師、理学療法士、作業療法士、管理栄養士、臨床心理士などとのチームワークが不可欠となる。そのため、チームの一員として、障がいのある人々を支えるという実践力を身につける。											
包括的ヘルスクエア論	包括的な視点で地域・在宅で生活している人々に対する保健・医療・福祉の施策の動向を学ぶ	1. 我が国の少子高齢化に伴う問題を理解する 2. 地域包括ケアの理論と制度を学ぶ 3. 地域包括的ケアの実際を学ぶ	40 30 30		◎ ◎ ◎	◎ ◎ ◎					○ ○ ○	○ ○ ○	
生命倫理	人の生命の尊厳と基本的人権、尊厳死などについて学び、言語聴覚士として基本的倫理原則・倫理理論を学ぶ	1. 人としての命の尊厳と基本的権利を言語聴覚士の視点から理解できる 2. 言語聴覚士として倫理的原則、生命・医療倫理を理解している 3. 日常生活の場の問題解決を倫理的判断にもとづいて考察できる	40 30 30			○ ○ ○	○ ○ ○					◎ ◎ ◎	
ターミナルケア	ターミナル期の問題を理解し、現状を学んだうえで、いかにターミナル期の患者に向き合うかについて、学修する	1. ターミナル期の患者が抱える問題を理解する 2. ホスピス運動や緩和ケアの現在について理解する 3. コミュニケーションスキルや死生観(基本的な心構え)などを学ぶ	35 35 30		○ ○ ○			○ ○ ○			○ ○ ○	◎ ◎ ◎	
専門職の連携(基礎)	医療福祉機関をはじめとした地域の生活者の支援に関わる職種の役割を理解する	1. 取得を目指している資格は、他職種と連携し、地域における包括的なヘルスクエアシステムを担い、人の命を救う専門職としての資格であることを理解する 2. 地域における包括的なヘルスクエアシステムを担う他の専門職を理解する 3. 他職種の視点を通して、将来についてのより明確な自己像を描けるようになる	35 35 30					○ ○ ○			○ ○ ○	◎ ◎ ◎	
専門職の連携(応用)	他職種との連携協働の実際を学習する専門職連携に関する発展的な科目と位置付け、実践力のある専門職として就職するための総まとめ的な学習を行う	1. 他職種間での専門的かつ高次なコミュニケーションをはかれるようになる 2. 事例を取り上げることで、より具体的で実践的な援助方法を理解する 3. 専門職としての自己意識を高め、資格取得に向けての意欲向上を目指す	35 35 30					○ ○ ○			○ ○ ○	◎ ◎ ◎	
医療福祉連携論	近年、医療から介護制度を含む福祉へのシームレスな連携が求められている。医療と福祉について理解を深め、それらの連携の実際と理想を学ぶ	1. 医療の実際について理解する 2. 福祉の実際について理解する 3. 医療と福祉との連携の実際と理想を理解する	35 35 30			○ ○ ○					◎ ◎ ◎	◎ ◎ ◎	
障害者福祉	社会福祉士及び精神保健福祉士として、障害者福祉サービスのこれまでの歴史、社会背景を通じて、現状の障害者福祉の意義と課題について習得できるようにする	1. わが国の障害者に関する歴史と施策に関して理解し、必要な行動がとれる 2. 障害者に対する福祉サービスの種類、目的、その効果について理解し専門職を目指す者として活用できる 3. 障害者福祉サービスと他の福祉サービスと比較し、総合的に理解できる	35 35 30		◎ ◎ ◎						○ ○ ○	◎ ○ ◎	
基礎ゼミⅠ	言語聴覚士を目指した学習の導入として、自ら考え学ぶという態度、学士力養成のための基礎的な能力を身につける	1. 自校史や建学の精神である仏教精神を理解している 2. 言語聴覚療法を自立して学習することができる 3. 個人面談による生活への順応や学生間・教員の間関係形成している	35 35 30		◎ ◎ ◎	○ ○ ○			◎ ○ ○				
基礎ゼミⅡ	言語聴覚士を目指した学習の導入として、自ら考え学んだことを、自らの言葉でまとめ発表する力を身につける	1. 自校史や建学の精神である仏教精神を理解している 2. 言語聴覚療法を自主的に学び発展させることができる 3. 他者の意見を尊重し、自らの意見を述べることで、人間関係をさらに発展させる	35 35 30		◎ ◎ ◎	○ ○ ○			◎ ○ ○		○ ○ ◎		
言語運用と数的処理の基礎	言語聴覚士に必要な言語運用能力と数的処理の力を養う	1. 日本語文法を理解し、それに従って文章を読解・作成できる 2. 数的処理の基礎を理解し、神経心理学的検査の処理ができる 3. 言語訓練・実施に必要な言語運用と数的処理の力をつける	35 35 30		◎ ◎ ◎	○ ○ ○							
健康カウンセリング	対人援助職としての対人関係の基礎と、実際の臨床に生かせる技術を学ぶ	1. 対人関係の基礎を理解する 2. カウンセリングに必要な基礎的技術を理解する 3. 実際の臨床に生かせる技術を習得する	35 35 30			○ ○ ○						○ ○ ○	
社会と統計	社会調査の基本的事項と意義について学ぶ。また、社会調査の歴史や実際の調査例についても学び、社会と統計との関わりについて理解を深める	1. 社会調査の目的と意義について理解する。 2. 社会調査の歴史や調査倫理について理解する。 3. 実際の調査例をもとに、量的調査、質的調査について理解する。	35 35 30			○ ○ ○						○ ○ ○	
社会保障制度・関係法規	社会保障制度の思想と、言語聴覚士に関する法律・制度を学ぶ	1. 社会保障制度とは何かを理解する 2. 社会保障制度の思想を学び、実際の法律を理解する 3. 言語聴覚士に必要な法律・制度を学ぶ	35 35 30			○ ○ ○		○ ○ ○					
栄養サポート論	健康者から患者に至るまでを対象とする健康の維持・増進・疾病予防・治療を目的とした栄養学的サポートについて学ぶ。特に、ライフステージ毎の課題に応じた栄養サポートを理解する	1. 発達期の栄養学的サポートについて理解する 2. 高齢者に対する栄養学的サポートについて理解する 3. 傷病者・障害者に対する栄養学的サポートについて理解する	35 35 30		◎ ○ ○	○ ○ ○						○ ○ ○	

学科目	科目の主題	科目の到達目標	ディプロマポリシーの項目番号								
			凡例 ◎: DP達成のため設定された項目と強い関連性がある ○: DP達成のため設定された項目と相当程度の関連性がある								
			配分	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
臨床医学総論	言語聴覚士を目指した医学学習の導入として、臨床医学について総合的に学ぶ	1. 臨床医学の分野等を網羅的に理解する	35	◎	◎					○	◎
		2. 臨床医療の現場で求められる医の倫理を理解する	35			○	○			◎	◎
		3. 医療人としての基本を学習する	30		○			◎		◎	○
臨床基礎医学	解剖学・生理学は人体の構造と機能を究める学問であり、医学の基礎中の基礎をなす学問である。これらの基礎医学につき理解を深めていく	1. 人体解剖学につき学習する	35		◎	○			○	◎	
		2. 生理学につき学習する	35		◎	○			○	◎	
		3. 疾患の理解につながるよう、臨床的視点を学習する	30		◎	○			○	◎	
リハビリテーション概論・医学	医学的リハビリテーションで行われる神経学・生理学の評価やADL評価を理解し、各疾患に対するリハビリテーションについて理解を深めていく	1. リハビリテーションの概念と各職種役割を学習する	35		◎	○			○	◎	
		2. リハビリテーションに用いられる評価方法を学習する	35		◎	○			○	◎	
		3. 各疾患に対するリハビリテーションの治療方法につき学習する	30		◎	○			○	◎	
音声・言語・聴覚医学Ⅰ(呼吸発声発語系)	人間の言語コミュニケーションの基盤となる呼吸・発声・発語(構音)器官の構造と機能、生理・病理的基礎知識を学ぶ	1. 模型など視覚教材を使用して構造と機能を学習する	35	◎				○		○	
		2. 音声はどのように産生され、疾患によりどのように障害されるかを理解する	35	◎				○		○	
		3. 講義で得た知識を言語聴覚療法の臨床に活用する基盤を養う	30	◎				○		○	
音声・言語・聴覚医学Ⅲ(神経系)	音声・言語および聴覚に関与する人体構造のなかで、中枢部位にあたる脳と神経系の解剖と生理および障害について学ぶ	1. 求心性聴覚神経路、遠心性構音運動神経路について理解する	35		◎			○		○	
		2. 錐体外路系と小脳路系について理解する	35		◎			○		○	
		3. それぞれの部位の損傷によって引き起こされる障害を理解する	30		◎			○		○	
言語発達学	出生前から聞き分ける力を持ち、新生児期から積極的なコミュニケーション行動をとるための言語発達、胎児期から話し言葉の完成とされる学童期までの言語発達について学ぶ	1. 言語発達を考えるための4つの理論について理解する	35	◎				○		○	
		2. 包括的に言語発達を捉えることができるようにする	35	◎				○		○	
		3. 言語発達障害学を理解する基礎を作る	30	◎				○		○	
生涯発達心理学	生物学的、心理的、社会的な側面から一生にわたって変化・発達し続ける人間の存在について学び理解する	1. 人の発達を、誕生から死ぬまでのスパンで理解する	35		○				◎		○
		2. 人生の長寿化、多様化について、生涯発達心理学の立場から学ぶ	35		○				◎		○
		3. 生物学的、心理的、社会的な側面から人間の発達を学ぶ	30		○				◎		○
認知・学習心理学	言語聴覚士として身につけておくべき認知心理学と学習心理学の基礎を学ぶ。	1. 学習心理学における主要な学説の成立過程と内容について理解する	40		◎					○	
		2. 認知心理学台頭の背景と理論について理解する	40		◎					○	
		3. 学習心理学と認知心理学の言語聴覚障害学分野における臨床応用について理解する	20		◎					○	
臨床心理学	臨床心理学の基本的な概念や考え方について学ぶ	1. 臨床心理学の基本的な概念を理解する	50		○				○		◎
		2. 種々の心理療法を学ぶ	30		○				○		◎
		3. 心理臨床面接での応答や姿勢を学ぶ	20		○				○		◎
言語聴覚障害学概論	4年間の言語聴覚専攻課程の導入として、言語聴覚士が治療対象とする言語、コミュニケーション、認知、あるいは摂食・嚥下障害を体系的に学ぶ	1. それぞれの障害の病態や発現機序を理解する	35	◎				○		○	
		2. 情報収集・検査→評価・診断→治療を科学的に行うことを理解する	35	◎				○		○	
		3. 言語聴覚療法を体系的に理解する	30	◎				○		○	
聴覚障害学概論	聴覚障害の臨床実践に必要な基礎知識を体系的に履修し、その上で聴覚障害児・者に対する言語聴覚士の臨床実践の意義がどのような点に求められているのかを学ぶ。障害の発現・評価・指導実践に不可欠な諸検査等、支援と指導の方法概論について学ぶ	1. 聴覚障害の臨床実践に必要な基礎知識を理解する	35	◎							
		2. 障害の発現・評価・指導実践上、必要な聴覚検査と情報収集のあり方について基本的知識を身につける	35	◎							
		3. 発見から(リ)ハビリテーションに至る流れ・概要を理解する	30	◎							
臨床医学Ⅰ(内科学・小児科学)	臨床医学の基礎をなす内科学と、発達を考えるうえで基礎となる小児科学を学び、それぞれの時期における障害の特徴を学習する	1. 日常よく出会う内科的疾患の概要や病態生理を理解する	35		◎				○		○
		2. 子ども特有の生理や病理、疾患について理解する	35		◎				○		○
		3. 言語聴覚療法との関連で、上記の理解を深める	30		◎				○		○
臨床医学Ⅱ(耳鼻咽喉科・形成外科)	言語聴覚士に必要な耳鼻咽喉科学・形成外科学の知識を得る	1. 構造と機能について理解する	40		◎				○		○
		2. 疾患(特に先天性奇形)、外傷、熱傷などについて知識を得る	40		◎				○		○
		3. 手術等の治療法について知識を得る	20		◎				○		○
臨床医学Ⅲ(精神医学・臨床神経学)	脳および神経系の正常構造と機能を理解したうえで、言語聴覚士に必要な精神疾患および神経疾患の診断と治療について学ぶ	1. 脳および神経系の正常な構造と機能について理解する	40	◎	◎				○		○
		2. 神経疾患の診断と治療について理解する	40	◎	◎				○		○
		3. 精神疾患の診断と治療について理解する	20	◎	◎				○		○
臨床歯科医学・口腔外科学	口腔の構造と機能ならびに構音・摂食嚥下障害と関連のある疾患と治療法について学ぶ	1. 構造と機能について知識を得る	40		◎						○
		2. 構音障害や摂食嚥下障害を引き起こす疾患について理解する	40		◎						○
		3. 手術や補綴的処置などの治療法について知識を得る	20		◎						○
心理測定法	言語や認知機能に障害を持つ患者の症状を評価する際には、様々な心理検査を行う必要がある。心理検査によって得られたデータの分析と評価の方法を学ぶ。	1. 心理物理学的測定法について理解する。	35	○	◎			○			
		2. テスト理論と尺度構成法について理解する。	35	○	◎			○			
		3. 検査データの統計学的解析法を理解する。	30	○	◎			○			
言語学	本講義では、人間の言語とはどのような性質を持っているのかを様々な角度から考え、言語学の基本的な知識を身につけることを目的とする	1. 音韻論について理解する	35		◎						
		2. 形態論について理解する	35		◎						
		3. 統語論について理解する	30		◎						
音声学	発声の仕組みに基づく音声の特徴と種類について学び、種々の音声を聞き分け、発音することを学ぶ	1. 音声の音響的性質と発声の機構を理解する	35		◎						
		2. 音声要素の種類と体系の表記法を理解する	35		◎						
		3. 音声の正確な聴取と発音することを理解する	30		◎						
音響学	言語聴覚士の職務を遂行する際に必要な音響に関する知識を学ぶ	1. 音の物理的性質について理解する	35		◎						
		2. 音の聴覚知覚について理解する	35		◎						
		3. 音声生成について理解する	30		◎						

学科目	科目の主題	科目の到達目標	ディプロマポリシーの項目番号								
			凡例 ◎: DP達成のため設定された項目と強い関連性がある ○: DP達成のため設定された項目と相当程度の関連性がある								
			配分	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
失語症 I	失語症について、失語症状の定義、随伴症状、原因疾患、脳の損傷部位などの基礎知識を学ぶ。この科目は1年生に実施するため、失語症状をより具体的に、かつ、分かりやすいように視聴覚教材を多用し、演習形式も随時取り入れていく	1. 失語症状の定義を学ぶ	35	◎	◎					○	
		2. 失語症の随伴症状を学ぶ	35	◎	◎		○		○		
		3. 失語症の原因疾患、脳の損傷部位を学ぶ	30	◎	◎	○		○			
失語症 II	この授業では情報収集・検査→評価・診断→治療→再評価という実際の臨床方法を学ぶ。評価・診断では症候論や認知神経心理学的見方を演習形式で学習する。治療では刺激法、遮断除去法、機能再編成法、認知心理学的方法などを学習し、演習を行う。また、失語症者の心理的・社会的問題や環境整備への支援など言語聴覚士としての役割についても学ぶ。	1. 評価・診断では症候論や認知神経心理学的見方を学習する	35	◎	◎				○		
		2. 治療では刺激法、遮断除去法、機能再編成法、認知心理学的方法などを学習する	35	◎	◎		○		○		
		3. 失語症者の心理的・社会的問題や環境整備への支援など言語聴覚士としての役割について理解する	30	◎	◎	○		○			
高次脳機能障害 I	この授業では、高次脳機能障害の定義・種類、背景症状、視覚認知の障害、視空間障害、聴覚認知の障害、触覚認知の障害、身体意識・病態認知の障害等について、その症状と病巣の関係を理解する。主たる検査方の概要を学び、リハビリテーション方法についても講義を行う。	1. 高次脳機能障害のそれぞれの定義や病態を理解する	40		◎				◎	○	
		2. それぞれの病態に対する評価方法を理解する	40		◎				◎	○	
		3. それぞれの病態に対する治療的アプローチを理解する	20		◎				◎	○	
高次脳機能障害 II	この授業では、高次脳機能障害のうち、行為・動作の障害、記憶の障害、前頭葉の高次脳機能障害、脳梁離断症状、認知症、脳外傷等について、その症状と病巣の関係を理解する。主たる検査方の概要を学び、リハビリテーション方法についても講義を行う。また、症例提示や国家試験問題についても言及し、高次脳機能障害演習につなげる授業とする。	1. 高次脳機能障害のそれぞれの定義や病態を理解する	40		◎				◎	○	
		2. それぞれの病態に対する評価方法を理解する	40		◎				◎	○	
		3. それぞれの病態に対する治療的アプローチを理解する	20		◎				◎	○	
言語発達障害学 I A (各論)	正常な言語発達を支える発達の基盤など基礎知識を学んだ上で、各障害類型と言語コミュニケーション症状について学ぶ	1. 正常な言語発達を支える発達の基盤など基礎知識を理解する	35	◎		○					
		2. 各障害類型を理解する	35	◎		○	○				
		3. 各障害の言語コミュニケーション症状について理解する	30	◎		○	○				
言語発達障害学 I B (各論)	言語発達障害学 I A (各論)において得た知識を基に、特異的言語発達障害、知的障害の言語・コミュニケーション障害について学ぶ	1. 特異的言語発達障害、知的障害の言語・コミュニケーション障害について学ぶ	35	◎		○	○				
		2. 学習障害、注意欠如多動性障害、自閉症スペクトラムの言語・コミュニケーション障害について学ぶ	35	◎		○	○				
		3. 脳性麻痺・重複障害の言語・コミュニケーション障害について学ぶ	30	◎		○	○				
言語発達障害学 II (評価)	様々な言語発達障害の特性に応じた検査・評価の方法を学び、かつ、検査・評価の結果を指導につなぐことを学ぶ	1. 各検査の特性を理解する	35				◎		○	○	
		2. 検査の実施法を理解する	35				◎		○	○	
		3. 検査結果をもとに指導方針を検討することを理解する	30				◎		○	○	
言語発達障害学 III (指導法)	発達障害の種類や発達段階に応じた指導・支援の方法について具体的な知識を持つ。	1. 評価に基づいた指導・訓練案の立案を理解する。	35	◎			○			○	
		2. 指導・訓練の方法を理解する。	35	◎			○			○	
		3. 言語・コミュニケーション環境の整備の方法を理解する。	30	◎			○			○	
発声発語障害 I A (小児構音障害)	発声発語のメカニズムと正常な構音発達など必要な基礎知識を理解したうえで、言語発達の過程で構音障害を引き起こす要因、構音障害の定義、分類、特性について学ぶ。小児の発達の過程で問題となる機能性構音障害について学ぶ。	1. 正常な構音発達について理解する	35	◎			○			○	
		2. 構音障害の原因・定義・分類について学ぶ	35	◎			○			○	
		3. 機能性構音障害について学ぶ	30	◎			○			○	
発声発語障害 I B (小児構音障害)	発声発語障害 I A (小児構音障害)で得た知識を基に、発達期に問題となる器質性構音障害の代表である口蓋裂に伴う構音障害について学ぶ。	1. 器質性構音障害について理解する	35	◎			○			○	
		2. 口蓋裂に伴う構音障害について学ぶ	35	◎			○			○	
		3. 構音障害の検査・評価法及び指導法を理解する	30	◎			○			○	
発声発語障害 II A (成人)	成人の発声発語障害のうち、音声障害及び運動障害性構音障害について、適切な評価を行うための知識を習得する。はじめに、呼吸・発声発語器の解剖生理及び発声発語に関わる神経系を理解する。それらの基礎的知識をもとに、発声発語のメカニズムについて学び、その障がいである音声障害及び運動障害性構音障害の原因疾患、障がいの発生機序、症状の特徴、評価法について学ぶ。運動障害性構音障害については7つのタイプ分類についても習得する。	1. 呼吸・発声発語器の解剖生理及び発声発語に関わる神経系を理解する	35	◎			◎			○	
		2. 発声発語のメカニズムについて学び、その障がいである音声障害及び運動障害性構音障害の原因疾患、障がいの発生機序、症状の特徴、評価法について学ぶ	35	◎			◎			○	
		3. 運動障害性構音障害については7つのタイプ分類について学ぶ	30	◎			◎			○	
発声発語障害 II B (成人)	音声障害及び運動障害性構音障害について、適切な評価に基づく治療・訓練を行うための知識を習得する。音声障害については、医学的治療と行動学的治療の内容を理解した上で、言語聴覚士が行う音声治療の直接訓練と間接訓練について学ぶ。運動障害性構音障害については、発声・構音・共鳴・プロソディのそれぞれの問題に即した訓練法を学び、さらに補綴装置の利用や拡大・代替コミュニケーションの技法についても学ぶ。	1. 適切な評価に基づく治療・訓練を行うための知識を習得する	35	◎			◎			○	
		2. 音声障害について、言語聴覚士が行う音声治療の直接訓練と間接訓練について学ぶ	35	◎			◎			○	
		3. 運動障害性構音障害について、訓練法を学び、さらに補綴装置の利用や拡大・代替コミュニケーションの技法についても学ぶ。	30	◎			◎			○	
発声発語障害 III (吃音)	この講座では主に発達性吃音をとりあげる。吃音とは具体的にどのような障害であるのか、なぜ生じるのか、言語面や心理面の評価はいかにするのかをまず学ぶ。次いで、幼児期、学齢期(小学生)、成人期(中学生以降)それぞれに必要な支援の方法＝「環境調整や言語訓練」はどのようにしたらいいのかなど、吃音に関する問題を実習を交え教授していく。	1. 発達性吃音についての基礎知識を理解する	35	◎			◎		○	○	
		2. 吃音の検査法・評価法を理解する	35	◎			◎		○	○	
		3. 各進展段階に応じた指導法を理解する	30	◎			◎		○	○	

学科目	科目の主題	科目の到達目標	ディプロマポリシーの項目番号								
			凡例 ◎: DP達成のため設定された項目と強い関連性がある ○: DP達成のため設定された項目と相当程度の関連性がある								
			配分	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
摂食嚥下障害学	摂食嚥下に関わる体の構造と機能、ならびに、それらを制御する脳の機能についての理解を基礎として、正常な摂食嚥下、摂食嚥下障害、摂食嚥下障害の評価法と指導法を学ぶ	1. 摂食嚥下のメカニズムを理解する。発達や加齢による変化についても理解する	35	◎			◎		○		○
		2. 摂食嚥下障害の臨床像について理解する	35	◎			◎		○		○
		3. 摂食嚥下障害に対する評価法、指導法、外科的対応、補綴的処置について理解する	30	◎			◎		○		○
聴覚障害学Ⅰ(補聴人工内耳)	聴覚障害概論の内容をふまえ、難聴発見後に求められる補聴機器(補聴器・人工内耳)の選択・調整・装用効果判定のあり方とそれらに関わる言語聴覚士の役割等について学ぶ。臨床の実践に先立ち必要な基礎的知識を履修する。	1. 補聴器・人工内耳についての理論・基礎知識を理解する	35	◎			◎		○		○
		2. 補聴器などのフィッティング技能、また装用校下の相違と効果の限界について理解する	35	◎			◎		○		○
		3. 臨床現場に参加する際、適切な機器の選択と、各調整手続きの実際を理解する	30	◎			◎		○		○
聴覚障害学Ⅱ(小児)	基本的信頼関係から始まり、音を享受しかつ他感覚と協働しつつ言語の獲得・習得と主体的な運用に至るまでの発達を見通し、小児聴覚障害についての基礎的知識を学ぶ	1. 小児難聴の療育・教育システムについて理解する	35	◎			◎		○		○
		2. 指導理論の変遷と「聴覚学習理論」について理解する	35	◎			◎		○		○
		3. 臨床実践の目的と枠組み、言語獲得・習得についての概要と支援法を理解する	30	◎			◎		○		○
聴覚障害学Ⅲ(成人)	聴覚障害の聴覚機能評価に必要な各種聴覚検査の原理と方法について学ぶとともに、補聴器について理解を深め、聴覚障害者の状況に応じて適切に補聴器適合するなどの支援ができる力を身に付ける。	1. 聴覚検査の原理と方法を理解する	35	◎			◎		○		○
		2. 補聴器の調整機能や特性について理解する	35	◎			◎		○		○
		3. 適切な補聴器適合など聴覚障害者に応じた支援ができる力を身に付ける	30	◎			◎		○		○
音声・言語・聴覚医学Ⅱ(聴覚系)	正常聴覚機能とその障害に関する基礎的事項について習得する	1. 外耳、中耳、内耳から聴覚中枢に至る聴覚伝導路の正常解剖および生理について習得する	40		◎	○			○		
		2. それぞれの障害に伴って生じる疾患の病態について理解する。	40		◎	○			○		
		3. 病態評価に必要な聴覚系の検査について解説し、検査の具体的手技と結果の評価法について習得する	20		◎	○			○		
言語聴覚障害診断学演習Ⅰ(小児)	小児の言語・コミュニケーション障害の各領域における検査法や指導法ならびに他職種との連携の仕方を学び、言語聴覚士の役割を理解する。	1. 情報収集・評価の方法を理解する。	35	◎		◎			○		
		2. 指導・訓練法を理解する。	35	◎		◎			○		
		3. 再評価による指導・訓練結果の検討や報告書の作成の方法を理解する。	30	◎		◎			○		
言語聴覚障害診断学演習Ⅱ(成人)	失語症・構音障害・高次脳機能障害・聴覚障害などの症状を正しく、評価・鑑別診断することを学び、併せて、随伴する重複症状を科学的に見極めることを学ぶ	1. 言語聴覚障害の症状を正しく評価・鑑別診断できる	40	◎			○		◎		○
		2. 主症状に随伴する重複症状を見極め評価できる	40	◎			○		◎		○
		3. 言語聴覚障害の全体像を理解・把握し、治療プランを立てる	20	◎			○		◎		○
失語症演習	失語症の情報収集・検査→評価・診断→治療→再評価という実際の臨床方法を演習を行う。ディスカッションを可能な限り行い、論理的に考え、説明できる力を育てることを主眼にする	1. 実際の臨床方法を演習し、ポイントを理解する	40	◎					◎		○
		2. 報告書の作成や他部門(PT、OT、NS、心理など)とのチームアプローチの実際も学習する	40	◎					◎		○
		3. ディスカッションを可能な限り行い、論理的に考え、説明できる力を育てる	20	◎					◎		○
高次脳機能障害演習	高次脳機能障害の検査・評価方法及び治療について実技演習を通じて学ぶ	1. 高次脳機能障害検査の実際を学ぶ	40	◎					◎		○
		2. 検査結果から、総合的評価が出来るようにする	40	◎					◎		○
		3. 評価から、患者や家族への説明が出来るようにする	20	◎					◎		○
言語発達障害学演習	言語発達障害の臨床に用いる各種の発達検査や知能検査の特性を理解し、検査を実施し、結果を算出する方法を理解する。	1. 各検査の特性を理解する。	35	◎					◎		○
		2. 各検査が実施できる。	35	◎					◎		○
		3. 検査の結果をまとめる方法を理解する。	30	◎					◎		○
発声発語障害演習Ⅰ(小児)	小児の構音障害の臨床の流れを演習で学ぶ	1. 問診・構音検査・構音器官の検査で情報を収集することを理解する	35	◎					◎		○
		2. 評価と指導方針の決定について理解する	35	◎					◎		○
		3. 構音訓練の技法を理解する。各種文書の書き方を理解する。	30	◎					◎		○
発声発語障害演習Ⅱ(成人)	運動障害性構音障害及び音声障害について、情報収集→評価(検査)→鑑別診断→訓練プログラムの立案→訓練の実施という実際の臨床方法を学ぶ	1. 実際の臨床方法を演習し、ポイントを理解する	35	◎					◎		○
		2. 報告書の作成や他部門(PT、OT、NS、心理など)とのチームアプローチの実際も学習する	35	◎					◎		○
		3. ディスカッションを可能な限り行い、論理的に考え、説明できる力を育てる	30	◎					◎		○
摂食嚥下障害学演習	摂食・嚥下障害について言語聴覚士が行う具体的な検査・評価・診断法について学ぶ。また、症状に対応した訓練、食形態や姿勢、食事介助方法、訓練実施上の危機管理等、臨床技術を習得することを目的とする。	1. 実際の臨床方法を演習し、ポイントを理解する	35	◎	○				◎		○
		2. 検査・評価・診断法を、臨床場面を想定して理解する	35	◎	○				◎		○
		3. 論理的に考え、実践できる力を育てる	30	◎	○				◎		○
聴覚障害学演習	各聴覚検査と補聴器特性の測定と評価方法を演習を通して学ぶ。実際に検査装置、測定装置を操作し、種々の聴覚検査の検査方法と評価、補聴器の周波数特性の測定などについて演習を行う。	1. 演習を通じて、各種聴覚検査技術や測定技術を身に付ける。	35	◎	○				◎		○
		2. 聴覚や補聴器、補聴器の適合状態を評価する力を養い、実践力を高める	35	◎	○				◎		○
		3. ディスカッションを可能な限り行い、論理的に考え、説明できる力を育てる	30	◎	○				◎		○
画像診断学演習	言語障害や認知機能障害を引き起こす脳神経系の構造的あるいは機能的異常について画像を通して学ぶ。	1. 主要な画像診断法の特徴を理解する。	35	◎	◎						
		2. 言語障害を引き起こす神経疾患の画像的特徴を理解する。	35		◎						
		3. 認知機能障害を引き起こす神経疾患の画像的特徴を理解する。	30		◎						
言語聴覚障害学総合演習(検査・機器)	言語聴覚療法に必要な臨床心理・神経心理検査や聴力検査機器等の機械・器具を概観し、最新の機械・器具についても学習する	1. 言語聴覚療法に必要な検査・機器について最新の知識を学ぶ	35	◎			○		○		◎
		2. 代替コミュニケーション(AAC)や支援機器(AT)を用いることができる	35	◎			○		○		◎
		3. 当事者のQOLを高める支援方法について学ぶ	30	◎			○		○		◎

学科目	科目の主題	科目の到達目標	ディプロマポリシーの項目番号									
			凡例 ◎: DP達成のため設定された項目と強い関連性がある ○: DP達成のため設定された項目と相当程度の関連性がある									
			配分	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	
言語聴覚障害実習Ⅰ	この演習では学内の教員の下、言語聴覚障害者(成人領域)の症状について、情報収集(検査)・評価の流れを学習し、他の言語障害との違いを理解する。演習形式で様々な検査法や訓練法を理解し、実施できることを目標にする。	1. 言語聴覚障害者(成人領域)の症状について学ぶ	35							◎	○	
		2. 情報収集(検査)・評価の流れを学ぶ	35							◎	○	
		3. 様々な検査法や訓練法を理解し、実施できる力を育てる	30							◎	○	
言語聴覚障害実習Ⅱ	対象者、スタッフとの円滑なコミュニケーションをはかるための基本的な対応について学習し、理解する。臨床に対する意識、コミュニケーションの基本となる共感的態度、コミュニケーションスキル、豊かな人間性など医療従事者としての基本的な態度やスキルを習得することを目標にする。	1. 円滑なコミュニケーションをはかるための基本的な対応について学習する	35							◎	○	
		2. 臨床に対する意識を学ぶ	35							◎	○	
		3. 医療従事者としての基本的な態度やスキルを習得する	30							◎	○	
言語聴覚障害実習Ⅲ	3年次行った評価実習を踏まえ、患者を適切に評価、統合的に解釈、問題を把握し、再評価を含めた、その問題に応じた言語聴覚療法プログラムを設定することを学ぶ。特に総合実習なので、仮説設定、訓練方法の立案、訓練の実施・スキル、再評価、仮説検証・修正の流れを理解し、実践できるようにする。	1. 患者を適切に評価、統合的に解釈、問題を把握する力を育てる	35					◎		◎	○	
		2. 問題に応じた言語聴覚療法プログラムを設定することを学ぶ	35							◎	○	
		3. 仮説設定、訓練方法の立案、訓練の実施・スキル、再評価、仮説検証・修正の流れを理解し、実践できるようにする。	30							◎	○	
言語聴覚障害実習Ⅳ	演習を通じて、対象患者の実習の過程で言語聴覚士の社会的役割とチームワークの重要性、理論的・法的責任を理解し、言語聴覚療法実施上の総合的な能力を高める。また、対象患者の心理的問題や家族が抱える悩みを理解し、共感する態度を学ぶ。そして、言語聴覚障害を抱えながらも生きていく対象患者を支援し、共感する態度を学ぶ。	1. 言語聴覚士の社会的役割とチームワークの重要性、理論的・法的責任を理解する	35							◎	○	
		2. 言語聴覚療法実施上の総合的な能力を高める	35							◎	○	
		3. 心理的問題や家族が抱える悩みを理解し、共感する態度を学ぶ	30							◎	○	
認知症特論	認知症は高齢化社会において重要な課題である。認知症の症候学、診断学、治療体系につき概説する	1. 総論について、診断学の歴史と最近の知見を学ぶ	35	◎						○	○	◎
		2. 認知症の症候学について学ぶ	35	◎						○	○	◎
		3. 認知症の治療体系について学ぶ	30	◎						○	○	◎
摂食嚥下障害学特論	現場での臨床業務に役立つ内容について、各講師が、それぞれの専門とする領域における最近の知見を交えて講義する	1. 脳卒中や神経難病による摂食嚥下障害や、栄養サポートチームでの役割について学ぶ	35	◎						○	○	◎
		2. 耳鼻科疾患による摂食嚥下障害や、手術療法について学ぶ	35	◎						○	○	◎
		3. 口腔生理学に基づく摂食嚥下障害への対応や補綴について学ぶ	30	◎						○	○	◎
卒業研究	臨床現場に出た後も、言語聴覚学を学び、研究し続ける姿勢を養うことを目的とし、その第一歩となる研究論文を完成させる	1. 学生自身が興味を持った研究テーマを選択し、そのテーマに合った研究デザインの作成を行う	35			◎			◎			
		2. テーマに沿った資料収集、データ収集、分析法、表現法などを学ぶ	35			◎			◎			
		3. 出来るだけ発表とディスカッションの場を多く設け、議論しつつ、論理的に、かつ科学的に研究を進める方法を学ぶ	30			◎			◎			
専門ゼミⅠ	専門課程の幅広い内容について体系的に整理し、理解を深め、言語聴覚士という専門職として必要なスキルや知識を修得する	1. 臨床実習(評価実習)において臨床現場で修得した評価方法について説明できるようにする	35			◎			◎			
		2. 指導教官や他の学生とのグループ討議の中で理解を深める	35			◎			◎			
		3. 具体的な訓練プログラムの立案や実際の支援につなげていくことを学ぶ	30			◎			◎			
専門ゼミⅡ	本学を卒業後に言語聴覚士として臨床現場で円滑に働けるスキルや知識を修得する	1. 臨床実習(総合実習)において臨床現場で修得した評価方法及び訓練方法、支援方法を説明できるようにする	35			◎			◎			
		2. 指導教官や他の学生とのグループ討議や、個別指導の中でより理解を深める	35			◎			◎			
		3. これまでの学習の中で不足している部分について、学習を反復して行い、現場での実践に備える	30			◎			◎			
臨床実習(見学実習)1週間	臨床実習(見学実習)は、1年次に実施した1日見学実習で得た、言語聴覚士の現場での学びを、1週間を通して、より詳細に把握する	1. 言語聴覚士の現場での臨床を詳細に把握する	40			◎				○	○	◎
		2. 見学内容と机上での学びを結びつけることで、専門科目の理解を深める	40			◎				○	○	◎
		3. より具体的な言語聴覚士像を掴む	20			◎				○	○	◎
臨床実習(評価実習)4週間	臨床評価実習は、言語聴覚障害を持つ子ども・成人の症状を評価・診断できることを目標とする	1. 症例の症状を正しく測定し、評価を行う	40			◎				○	○	◎
		2. 評価から正確な鑑別診断を行う	40			◎				○	○	◎
		3. 評価と診断に基づいて実施される言語聴覚療法を理解する	20			◎				○	○	◎
臨床実習(総合実習)8週間	それまで学んだ基本的知識と技術を応用し、臨床実習指導者の指導のもとに患者を介して言語聴覚療法評価・治療を体験する	1. 患者を適切に評価、統合的に解釈、問題を把握する	40					◎		○	○	◎
		2. 問題に応じた言語聴覚療法プログラムを設定・実践し、さらに、再評価を行うことによって治療効果を検討する	40					◎		○	○	◎
		3. 言語聴覚士の社会的役割とチームワークの重要性、理論的・法的責任を理解し、言語聴覚療法実施上の総合的な能力を高める	20					◎		○	○	◎